

負の遺産 手作り公園に

大阪・泉佐野

朝日新聞 14(h26).8.30

元事業用地 住民らが整備

大阪府の「負の遺産」だった土地が公園に生まれ変わった。竹のチップを敷き詰めた小道、生き物が観察できる水辺……。行政がお金をかけず、ボランティアが少しずつ手をかける。こんな試みによる府営公園「泉佐野丘陵緑地」（泉佐野市）が30日、開園した。

関西空港を見下ろす75秒ほどの里山。開園した。泉佐野丘陵緑地が公園に生まれ変わった。竹のチップを敷き詰めた小道、生き物が観察できる水辺……。行政がお金をかけず、ボランティアが少しずつ手をかける。こんな試みによる府営公園「泉佐野丘陵緑地」（泉佐野市）が30日、開園した。

午前10時すぎ、公園のゲートが開いた。さっそく子どもたちが雑木林の小さな池のまわりにしゃがみ込む。年配の男性が「ほら、むこうに小エビがいる」



③泉佐野丘陵緑地が開園すると、さっそく手作りの池の周りに子どもが集まった。30日

④パーククラブの松井弘代表（手前）たちがのこぎりで竹を切り、公園の小道を作った。24日、いずれも大阪府泉佐野市上之郷



こうした「パークマネジメント」（公園の経営的管理運営）を意識した公園作りは広まりつつある。

兵庫県立有馬富士公園（三田市）は、住民参加型の先駆けだ。01年の開園前から公募の市民も含む協議会で運営方針を決定。現在は31団体が参加し、一般の人が提案した動植物の研究、里山の維持管理などの企

広がる参加型

「パークマネジメント」の編者がある千葉大学の田代順孝名誉教授は泉佐野丘陵緑地の手法について「ライフスタイルや社会的情勢にあわせてみんなで作り上げ、変えていくことができる。これからの大規模公園のモデルになるのでは」と評価している。

（上田真由美）

と指さし、近くで男の子が「バッタ捕まえた！」としゃべった。

公園は地域住民らでつくる「パーククラブ」のメンバーが手がけた。8畳ほどの池は5日程度かけてスコップで土を掘り、水路を通して石で縁取りした。岸辺には、この山から切り出した丸太のベンチを置いた。

もとは府の「泉佐野コスモポリス」事業の計画地だった。閑空の需要を当て込んだ先端工業団地の整備計画を進めた第三セクターが経営破綻し、1998年に解散。府は156億円で買い取った。有識者の検討委員会は自然に極力手を加えない「施設より、活動プログラム重視型」との方針をまとめた。

パーククラブは2010年8月、樹林の調査や間伐作業などを学ぶ府の講座をきっかけにできた。メンバ

「は府内外の92人。公園作りを任せられ、生い茂っていた竹をのこぎりで切るところから始めた。切った竹でチップを作り、それを敷き詰めると小道ができた。この4年間で月10回ほど、延べ4455人が活動した。

府がお金をかけたのは、駐車場や主な浴道だけ。7年間に約12億円という低予算だった。同じように丘陵にある岸和田市の府営蜻蛉池公園（53・2秒）はテニスコートや球技場も含む整備に95億円かけており、府公園課は「運動施設などを作らず、地形をそのまま生かしただけの公園は珍しい」（担当者）という。

今回、開園したのは敷地の6分の1程度。樹林帯が濃い残りの地区は少しずつ計画を練る。パーククラブ代表の松井弘さん（67）は「完成しないからこそおもしろい。変化を楽しんでほしい」と話す。干し柿作りやキノコ調査、園路作りなどを催し、参加者と一緒に公園を育てていく考えだ。